

隔月連載 第3回

植物たちのワイズユース

～植物をもっと活かすための知恵と技術～

素材としての
植物さまざま

辻井 達一 (つじい たついち)

財北海道環境財団理事長

1931年東京都生まれ。59年北海道大学大学院農学研究科博士課程修了・農学博士。60年北海道大学農学部講師、62年北海道大学教授、85～89年北海道大学農学部附属植物園長（併任）、88年北海道大学農学部教授（農林生態学研究室）、95年北星学園大学教授、97年財北海道環境財団理事長。国際湿地保全連合理事、日本委員会会長、釧路国際ウエットランドセンター理事等公職多数。

1 エゾカンゾウ、シカに食われる!?

霧多布湿原にはいろいろな花が咲くが、なかでもエゾカンゾウの群落が売りものの一つで、毎年、6月末にはエゾカンゾウ祭りが開かれる。ところが2010年は珍しいほどの不作で祭りが体をなさなかった。花がエゾシカに食われてしまったのであった。

これはこの年だけのことではなくて、数年前からその兆候が見られていた。「何だか、最近、エゾシカが湿原に入っているんじゃないか」という声がかかり多かったのだ。そこで花への影響がどれくらいあるか、調べることになり、柵を回らせて入れないようにしたところを設けて見比べた。シカがどういう行動をとるかもカメラを設置して観測した。

柵を結って入れないブロックでは花が食われないのは当然だから、これは柵外、つまり食われる場所との花の残り具合の比較である。

カメラでの観測では面白いことがわかった。シカは草食動物の常として、時々、首をもたげて周囲を見まわす。そして安全を見届けてまた頭を下げ草を食べる動作を繰り返す。その、さて、また食べ始めるか、という時に目の前の花や蕾をぱくりとやるらしい、と最初はそう見えた。

つまり、花や蕾を狙って湿原へ入っているのではない、ほんのついでなのであるらしい。エゾカンゾウにしてみればいい迷惑であるが。

しかし、さらに観測を長く続けると、必ずしもそうでもないらしい。つまり口直しのだけでなく、やはり食べ慣れてきて、どうやらお気に召したと言わん



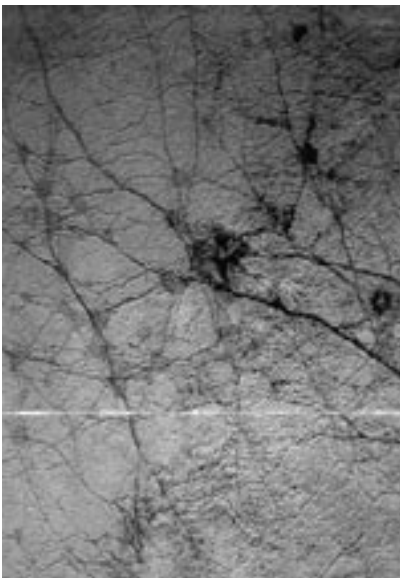
霧多布湿原のエゾシカ（撮影：辻井 達一）

ばかりの風情。これはどうも困るではないか。湿原としては味を覚えられてははなはだ迷惑。

でも、なぜ湿原のような、四足歩行の動物にはいかにも歩きにくそうなところへ、なぜ、わざわざ入るのだろうか？少し前の空中写真を眺めてみたら、霧多布だけでなく釧路湿原その他、あちこちでシカの歩いた道があることがわかった。そのあるものはまるでシカのハイウェイとでも言いたいようなものまであって、それらが網の目のように交差している。

つまり、エゾシカの湿原侵入は、今、初めて始まったものではないのだ。ずっと前から彼らは湿原を少なくとも通り道としてはごく普通に使っていたのである。ただ、人間の方で気がつかなかっただけなのだ。あるいは、そういう場面に出会わなかっただけかもしれない。シカの数が増えてきて、湿原で見るチャンスも増え、当然の結果として湿原の花へもその影響が大きく及ぶようになった、とみるべきではないか。

ただし、もう一つの見方もある。現在、霧多布湿原でもっぱらエゾカンゾウの花を食べているのは17頭の群れだという。そのほとんどは雌だ。この群れが固定した（つまり決まった個体の）集団かどうか。もし、そうだとすると花食集団ができたのかもしれない。花の味を占めた、という群れだ、エゾシカの花食文化が成立したのか。こうなるときちんと個体識別して追跡し、確かめてみたら面白いだろう。



エゾシカのハイウェイ（撮影：岡田 操）

2 湿原植物のストックヤード

と、ここまでは動物側の話だが、植物側に立ち返って考えれば、あまり面白がってもいられないのだ。味を占めた集団がこれ以上増えては困るし、何とか味を忘れてもらいたい。脅かして追っ払うとか、湿原に入れないようにフェンスで囲うとか、いろいろな対策が考えられるが、どれも手間と経費が掛かる。

もし、味を占めた個体や個体群がもっと増えたりしたらどうなるだろう。そうすると霧多布湿原だけの問題ではなくなるではないか。面白がってばかりいられないのだ。

いずれにしても湿原の植物への影響が大きくなってきたわけだから、エゾカンゾウ祭りも含めて、何とか対策を考えなければならない。湿原の植物は人間のためばかりにあるわけではないが、総体に著しく減るとか、植生が回復不能になるとか、特定の種が極端に少なくなるとか、消滅しては困る。そこで、植物園なら苗畑が用意されるように、湿原植物のストックヤードを設けて、保存を考えてはどうか、ということになった。万一、種が著しく減少して危機的な状況になったら、ストックヤードから補充する、という考えである。

もう一つ、このストックヤードの計画には、エゾシカに食べられてしまうくらいなら、人間が食べてもいいではないか、という考えも含まれる。エゾカンゾウの仲間には中国では金針菜と言って、昔かられっきとした中華料理の材料の一つだ。乾燥させたものは横浜の中華街でも売っている。四川料理では立派な一皿となって登場する。



赤茸金針菜（養源郷）

それを、このストックヤードで作ればいい。万一に備えての苗畑なのだから、いつもは余るはずで、それを有効に使えばいいのである。

そう考えれば何もエゾカンゾウに限ることはないで、ホロムイチゴなどもいいだろう。これは果実を生でもそしてジャムにも、リキュールにも使える。北欧では結構、高価なものなのだ。フィンランドなどではほとんど日常的な食品にさえ近い。まあ、これは国土のかなりの部分が湿原だ、という自然条件からきていることではあるだろうが。

フィンランドでなくても多分、シベリアを抱えるロシアでも同じようなことだろうと思う。フレップというのは赤い実、ことにコケモモ、ツルコケモモの類を指すサハリン・アイヌの呼び方だが、広漠とした湿原にそれこそ一面に生えているその果実を集めて冬に向けての重要な食用にするという。ことにビタミンCに富んでいるのが特徴であり、意味があるわけで、先住民たちはそれを経験的に知っていて、雪と氷に閉ざされる秋から冬に向かっての食料としたのであろう。

そうした伝統はカナダでも現代に生きている。むしろ現代に活かしていると言った方が当たっているだろう。例の収穫感謝祭に大量に消費されるのが、あのロースト・ターキーに不可欠のクランベリー・ソースである。カナダではシーズンになれば、それはさながら北海道の初夏にイチゴがスーパーマーケットあたりで山盛りに積まれているように、同じく赤い実がどこでも目に付く。缶詰、瓶詰もあるが、それこそ家々で甘い、酸っぱいの、それぞれに家庭の味、おふくろの味として作られるのであろう。

では、それはどこから来るのか。あれほど大量消費となればいくら広い湿原があると言ってもそうは集めきれまい。

それらは専用の栽培圃場^{ほじょう}から来る。それはむしろ立派な水田といった趣きのもので、稲がクランベリーに代わっただけ、と思えばいい。実際、条件はほとんど同じで、張ってある水深まで似ている。

ただし、いざ、収穫という段になると、なにしろスケールが違って、水位を上げて赤い実を浮かし、それを専用のコンバインがかき集めるのだ。そして、さらにオイル・フェンス状の長い浮きロープでまとめ上げてすくい上げられる。まことに壮大を極める。まあ、これくらいの規模にしなければ到底、間に合うまいが。

しかし、もちろん1930年代頃まではこんな大げさな規模ではなかったらしくて、その当時の写真によれば先に挙げたような水田そっくりに水の張られた圃場に日雇い労働者と覚しき風体の男女が、これも田植えや稲刈りにそっくりな一列横隊に並び、先に櫛の歯状のものが付いた箱を手に手に、しきりに浮かんだクランベリーの実をしゃくってすくい取っているのが見られる。

食用のことから書き始めたが、湿原の野生の植物についても、まだこれまでに（少なくとも日本では）あまり、あるいはほとんど用いられてこなかった、いわばポテンシャル（潜在的可能性・利用性）のある植物はまだまだあるはずだ。それらについても、ここで挙げたストックヤード手法を適用するべきであろう。

たとえば、先に地域景観を整えるために植物素材を活かして使うには、まず、その素材の決定と、そのための材料としての供給システムを考えなければならない。これは植物的構築材料とでも呼ぶべきもので、コンクリートでいうなら石灰岩と砂と砂利にあたる。生コンと違うのは植物は生長すること、地域によって種



1930年代のクランベリー収穫

類が違うことだ。そこで、それら異なる素材を地域ごとに決めて、準備して、数をそろえて掛からなければならぬ。それが、ここでいうストックヤードなのだ。

3 地域景観における植生と人工構造物

さて、ここまで、もっぱら湿原における植物、それもほとんどは食用になる材料についての保護と活用の事例を挙げてきた。それらはもちろんいわゆるワイズユースの例ではあるが、もっと別な分野での野生植物の積極的なワイズユースも考えられてもいい。

前に挙げたような道路周辺環境としての植物の利活用から、さらに一步を進めて地域環境としての可能性はどうか。

浜中町すなわち霧多布湿原を抱えるところで、昨年(2010年9月)にその浜中町の景観を考える勉強会が開かれた。自然の色彩などを含めて、折から秋色に染まりかけた湿原を見ながらの勉強会だったが、自然の美しさだけに頼っているだけでなく、人工物もより魅力的なものにしていかなければなるまいという話をした。どちらかという地域景観は人工物で壊されている例の方が多いのだ。醜く、せつかくの自然の美しさを損なうようなものばかり造られては困る。

かつての日本の古い町の美しさというのは、たとえば屋根瓦にしても土地の土で焼かれたものであり、しかもそろっていたから、街並みも、その色彩も違和感がないことによる美しさだった。流通機構の発達は、どこでも、何でも直ぐに手に入る、という便利さをもたらしたが、一面では地域の景観的特徴を失わせた。

そうなると、結局のところは地域固有の自然特性なり、その特性を表している植物的自然に頼らざるを得ないではないか。あるいは、地域の植物の色彩から特徴を選び出してもいい。既に札幌では「札幌自然色：サッポロ・エコ・カラー」として自然の色の採集を行い、その幾つかをたとえば市内中心部電話ボックスなどの色として使う実験的試みをしている(熊谷直勝他、須田製版1987)。

その土地の植物の色を取り込むのだ。ここに挙げた例としての浜中町・霧多布でも、まだ、では、その取り込むべき植物は何か、までには至っていない。

建物の形や屋根の勾配をそろえたりするのはなかなか容易ではないが、できればそうした方向性の検討があってもいい。そして、そこまでいなくても、たとえば一番目立つ屋根の色彩だけでも、土地固有の植物の色から、あるいは質感から取り込んで、新しい地域の色として採用するといいたらう。

先に植物的構築物という言い方をした。当然のことながらこの言葉に対するのは人工構築物である。人工に限らなくて、動物も昆虫も優れた構築作業をすることは知られていて、蟻や蜂はその最たるもので、ことに蜂の六角形構造は傑作であり、ビーバー・ダムも見事な構造で有名ではないか。湿原で水が引いた直後に直ぐ蟻が出てくるが、彼らは泥炭の中で気泡を造ってその中に住んでいるらしい。

機能的なものは美しい、とはバウハウス※運営を行ったヴァルター・グロピウスの言葉だが、確かに優れた建築家のデザインには、生物が構築したもの、あるいは生物の構造そのものを想わせるものが多い。我々人間の体にもそうしたものが少なからず存在するではないか。

だから、結局は自然に勝つことはできないのかもしれない。けれども人間はやはり自らの環境を、住いを、あらゆる構造物を造らなければならない。自然をうまく模し、あるいは自然をうまく組み込むことを考えればいい。バウハウスよりももっと直接的に自然を取り込み、あるいは自然そのものを使えばいい。実際、既に新幹線の先頭車は、いよいよカモノハシそっくりになってきたではないか。



イタリア・コマッキオ瀉の古い町のリニューアル

※ バウハウス (Bauhaus)
1919年ドイツで設立された建築・工芸学校とその芸術活動。後のモダニズム建築に大きく影響した。